



ペドロ・メイヤー

石油の陰で

ミラマー・コレクション

ミラマール・コレクション

60年以上にわたる輝かしいキャリアを誇り、100万点を超える膨大なアーカイブを擁するペドロ・メイヤー。彼は今、進化し続ける自らの作品群に寄り添う多種多様な物語を、世に伝えるという大業に取り組んでいます。ここに綴られる物語は、写真家としての独自のまなざしに留まらず、その生涯を通じて情熱を注いできた写真界の地位向上のための活動や、職能団体における重要な歩みをも網羅しています。

「ミラマール・コレクション」は、回顧録であり自叙伝でもある集大成のシリーズです。全41巻を超えるこのコレクションは、1950年代から今日に至るまでの彼の写真表現の変遷を辿るものであり、伝統的な技法からAI(人工知能)といった最新技術の導入まで、その飽くなき探求の軌跡を克明に記録しています。

石油の陰で

石油国有化50周年を迎えた1980年代、ペドロ・メイヤーはメキシコ全土を巡り、メキシコ国営石油(Pemex)の社会プロジェクトを記録するために1万6千枚を超える写真を撮影しました。彼のレンズが捉えたのは、単なる産業構造物ではありません。その巨大な歯車を動かしている「人間という要素」を白日の下にさらしたのです。これらの素材をもとに、彼は1987年に『煙火(はなび)は一日中鳴り響いた(Los cohetes duraron todo el día)』を上梓しました。しかし、同書は検閲の対象となり、印刷された3千部のうち、著者の手元にわずか数冊が残されるのみとなりました。

あの暗い出来事から約40年の時を経て、メイヤーは自らの写真アーカイブを再検証し、本書においてそのプロジェクトを蘇らせました。歴史家フアン・ミゲル・スンスネギによる寄稿とともに、本作はPemexという神話、そして機械、労働力、政治の融合について深い思索を促します。メキシコの視覚的・歴史的な叙事詩を照らし出す、生命力に満ちた一冊として、今ここに再生します。

制作クレジット (LEGALES / CREDITS)

発行元

ペドロ・メイヤー財団 (Fundación Pedro Meyer, A.C.)

コレクション・コーディネーター

マリソル・モリーナ (Marisol Molina)

編集

ヘラルド・モンティエル・クリント (Gerardo Montiel Klint) ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)
アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz)

共同編集

ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo)

デジタル・ポストプロダクション

ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)
アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz)

執筆

フアン・ミゲル・スンスネギ
(Juan Miguel Zunzunegui)
ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)

コピーエディティング・校閲

テレサ・マルティネス
(Teresa Martínez)

編集監修

パブロ・メイヤー (Pablo Meyer)

印刷監修

マヌエル・ガルシア (Manuel García)

エディトリアルデザイン

アレクシス・オルティス
(Alexis Ortiz)
カルロス・メンドーサ
(Carlos Mendoza)

制作アシスタント

ルス・パステン
(Luz Pastén)
ソフィア・アシェントウルップ
(Sofía Aschentrupp)

© ペドロ・メイヤー、2026
www.pedromeyer.com

著作権保護に関する告知 著作権者またはその相続人による事前の書面による承諾なく、本書のいかなる内容も、アナログ・デジタルを問わず、目的の如何に関わらず、いかなる形式や手段によっても複製することを禁じます。

編集・印刷 編集:メキシコ市、コヨアカン 印刷:
メキシコ、オアハカ

ミラマール・コレクション
ISBN: 978-607-29-7238-4

石油の陰で (A la sombra del petróleo)
ISBN: 979-8-9996765-8-0

ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語の5言語による翻訳が閲覧できるQRコード。

「人間に関わることで、私に無縁なものは何ひとつない」この真理を教えてください、エーリヒ・フロム博士に捧ぐ。

体制の暗き神話

ファン・ミゲル・スンスネギ 著

人間は、抵抗することなく神話の犠牲者となっていった。——エルンスト・カッシーラー

革命から生まれたあらゆる体制は、その革命を神格化することを中心に据えた歴史観を構築する。革命前はすべてが混沌として恐ろしく、抑圧と暴政に満ちていた。しかし、革命後には未来が開け、民衆は希望を持つことができる。革命はすべてを可能にし、すべてを浄化する。そして、物語(ナラティブ)の力を通じて、凄惨な内戦を「歴史上の崇高な金字塔」へと変貌させるのである。

革命は体制にとっての「神話」であり、体制が自らに語りかける「嘘」であり、あらゆる行為を正当化する「旗印」である。それは他者が行えば忌まわしい思想や行動であっても、高潔なものへと書き換えてしまう。ウラジーミル・レーニンが述べたように、革命は道德の唯一の尺度となり、「目的が手段を正当化する」のだ。革命は革命家にとっての宗教であり、いかなる信仰もそれを支えるための神話が必要なのである。

革命が体制の神話であるならば、「社会正義」はすべての革命における物語のひな型となる。メキシコの特殊なケースにおいて、石油はその社会正義の象徴となり、革命のあらゆる価値と理想を具現化するものとなった。

しかし、問題がある。我々が「革命」と呼ぶメキシコの内戦は、単に権力者を大統領の椅子から引きずり下ろし、別の誰かをそこに座らせるという以上の理想など、微塵も持たずに始まったということだ。そこには、民衆を武装蜂起させながら、その後に投票を求めるという「素人革命家」特有の純真な旗印——すなわち、打倒と投票——しかなかったのである。

マデロに社会的大義などなかった。ウエルタやカランサも同様である。革命の継承者であるオブレゴンやカイエスらは、状況に合わせて後付けで大義を構築していった。衝突の中の偶像であったビリヤやサパタには理想があったかもしれないが、彼らは「誤称された革命」の勝者ではなかった。

この「全員対全員」の戦いの中で次々と勝利と敗北が繰り返されたが、抗争の最中に「黒い黄金(石油)」の旗を掲げた者は一人もいなかった。サン・ルイス計画、アヤラ計画、アグア・プリエタ計画といった、無計画な革命のどの計画にも石油は含まれていなかった。「有効な選挙、再選禁止」にも入っておらず、ましてや「土地と自由」というスローガンに組み込まれてもいなかった。

1910年のメキシコにおいて、石油は革命の一部でもなければ、どの陣営の象徴でもなかった。なぜなら、当時それを知る者はほとんどいなかったからだ。石油の価値を真に理解していたのは、ごく一部の者に過ぎなかった。メキシコ革命の背後にある唯一の現実は「貧困」と「民主主義の欠如」であり、そのどちらも我々の地下に眠る黒い粘液(チャポポテ)とは何の関係もなかったのである。

ナポレオンは、革命には二種類の人格があると言った。革命を「作る者」と、革命を「利用する者」だ。フランス革命ではボナパルト自身が後者であり、メキシコ革命ではラサロ・カルデナス将軍がそれであった。ポルフィリオ・ディアス失脚から24年後、石油を制する者が勝者となる二つの世界大戦の狭間にあったカルデナス政権下で、状況は一変した。メキシコの腹の中に溢れる炭化水素は、神話の完成、そして革命の決定的な勝利を象徴する完璧なシンボルとなったのだ。

カルデナスは、革命的ナショナリズムこそが「良きメキシコ人」であるための唯一の道であると説き、「石油は全メキシコ人のもの」という神話を創り上げた。この神話こそが、体制の背骨となった社会主義的ナショナリズムの根本的かつ創設的な「嘘」となったのである。神話ほど人間の精神を支配するものはない。そして、神話を操る術を知る者は、民衆をも支配する。これこそがメキシコの歴史であり、体制の暗き神話の正体である。

メキシコの黒い血 (SANGRE NEGRA MEXICANA)

我々の「黒い血」は、祝福であると同時に呪いでもあった。それは自ら富を噴き出す領土を我々に与え、世界というチェス盤の中心、そして人間の欲望の渦中へと我々を投げ込んだ。「石油は我々の所有物である」という言説は美しく響くが、実際には腐敗した体制を維持し、うわべだけの演説を発展させた以外に、我々が石油で成し遂げた善きことなど何もない。

メキシコにおける石油は、19世紀から外国の技術と資本によって開発されてきた。1917年憲法は「地中資源は国家に帰属する」という理論を打ち立てたが、当時の混乱したメキシコにおいて、その規定を実効化させることは事実上不可能だった。1938年、過酷かつ不毛な交渉の末、ラサロ・カルデナスは——あらゆる演説によれば——「悲劇的だが、必要かつ有益な」石油企業の国有化という決断を下した。

しかし、結局のところもう一つのマフィアに過ぎない「政党・国家・大統領」という複合体、そして労働組合を操り「実業家は敵、民衆は犠牲者、大統領は守護者」とするイデオロギーを持つ勢力が、国有化を可能にするために意図的に衝突を引き起こした可能性は常に残る。我々は1917年から理論上の所有者であったが、1938年に「強硬な手段」でそれを掘り出すための道具(鉄)を手に入れたに過ぎない。

石油が「民衆」の関心事となったのは、歴史上この瞬間からである。大統領が必要とした時に初めて、民衆はそのテーマに興味を持つ。石油のことはほとんど知らなくとも、それは大統領たちにとっての「主権」の象徴だった。

カルデナスが、強大なポルフィリオ・ディアスですら成し得なかった「外資系石油企業を従わせる」という偉業をどうやって達成できたのか。1938年、戦争が目前に迫りドイツが資源を渴望していた時期に、隣国アメリカへの相談なしにこのような決定を下せたなどと考えるのは滑稽である。

実際には、国有化によって最も利益を得たのはメキシコ政府ではなく、賠償金を受け取って国境の向こう側に精油所を建設したアメリカの企業家たちであった。メキシコの民衆は、多額の金を払ってアメリカの資本家に国境の向こうで精油所を作らせ、かつてメキシコで行われていた工程をアメリカ側に譲り渡したのである。これが国有化の正体だ。すなわち、極めて高くついた「象徴」であり、我々の手によらない「もう一つの決定」であった。

さらに追い打ちをかけるように、1940年までにカルデナスは労働組合の強欲さを嘆くようになった。石油は「全メキシコ人のもの」という教条とは裏腹に、その莫大な富は組合に留まり、組合は10億ドル以上の資産を抱えながら、それを国民と分かち合うことはなかった。

メキシコ的干上がりの時代 (SEQUÍA MEXICANA)

ミルトン・フリードマンは、政府にサハラ砂漠の管理を任せれば、5年で砂が不足すると言った。メキシコ政府はそれを証明した。1938年、世界的な産油国であった石油の管理を奪い取ると、数年後には早くも「不足」が叫ばれるようになった。

技術的限界以上に、企業に生産性がなかったのは、それを追求していなかったからだ。Pemex内部の汚職は凄まじく、石油価格が低かった時代には、地中から掘り出すよりもアメリカから輸入する方が安上がりで、その輸入過程でもまた汚職の滴り(おこぼれ)が生まれていた。

1973年、アラブ諸国による石油禁輸措置で価格が高騰した時、初めて汚職を含めても採算が合うようになった。メキシコは計画によってではなく、世界の情勢と「偶然」によって利益を得たに過ぎない。さらに幸運なことに、そ

の高価格時代にカンタレルという巨大油田が発見された。ロペス・ポルティヨ大統領は「我々は豊かさを管理することを学ばねばならない」という、後に嘲笑の的となる予言を残した。

我々は、あらゆる遺産相続人と同じ道を歩んだ。与えられた富は管理されることなく、ただ浪費される。富を管理する術を学ぶ唯一の方法は、労働と努力によってそれを自ら生み出すことである。しかし、体制は100年以上にわたり、生産性ではなく「神話」と、尽きることのないように見える資源(実際にはそうではないが)に依存して生き永らえてきた。

カルデナスは死の間際、石油産業から数千億ペソが浪費された現実気づいていた。国有化から30年後、カルデナス自身がその腐敗を知っており、石油が「全メキシコ人のもの」などではなく、黒い黄金を取り巻くマフィアのものであったことを理解していたのである。

しかし、一度走り出した列車を止めることはできなかった。石油はすでに彼が始めたナショナリズムの物語の背骨となっており、そのナショナリズムは「外国人だけが国家を傷つける」という神話に立脚していたからだ。1938年以來、石油の所有者となった数少ないメキシコ人たちは、実際にはその逆であることを証明し続けてきた。

新たなエネルギーは、もはや地理(土地)からもたらされるのではなく、頭脳からもたらされる。今日の資源である石油は地理的な運に左右されるが、未来の資源は科学、技術、知識、アイデア、そして創造性に依存する。

これに気づき、投資する者だけが未来を手にする。しかし今、この国は19世紀のイデオロギーと時代錯誤なナショナリズムにしがみついている。運によって与えられたに過ぎず、才能や能力の結果ではない、汚くて、破壊的で、非再生的な絶滅危惧種の資源に、一国の主権のすべてを託しているのだ。

石油は決して全メキシコ人の利益にはならなかった。一世紀を経て、我々の石油から生まれた善きものなど何もない。それはただ、体制の暗き神話であったに過ぎない。

それは、50周年の時のことだった

ペドロ・メイヤー 著
初版に掲載されたテキスト)

メキシコ石油国有化50周年に際し、メキシコ国営石油 (Pemex) のドキュメンタリーを制作するにあたって、いくつかの異なるアプローチが考えられました。最も分かりやすい道は、この50年間の成果の証として、畏敬の念を抱かせるような巨大な産業施設を網羅することだったでしょう。しかし、それらの石油化学工場、パイプライン、掘削プラットフォーム、海上作業区が、世界の他の場所にあるものと一体何が違うのでしょうか。答えは明白です。何も違いはありません。生産設備やプロセスは、本質的にどこへ行っても同じなのです。したがって、企業の固定資産の壮大さを中心に据え、それをカラー写真で表現するという案は、すぐに却下されました。

このドキュメンタリーをどのような視点で進めるべきか思案し続けていた時、現実そのものが答えをくれました。テーマは「人々」、つまりこの企業を形作っている石油労働者そのものであるべきだという答えです。私の写真の中で、産業施設は単なる背景に過ぎません。それらの施設の内部や周辺で、個人の目的を追い求め、企業に自らの文化的価値を吹き込んでいる男たち、女たち、そして子供たちこそが主役なのです。これこそが、この企業にメキシコ独自の魂とアイデンティティを与えている要素に他なりません。

この構想こそが、Pemexが世界の他の石油企業と何が違うのかを、どんな計画よりも雄弁に物語ってくれと私たちは考えました。その「文化」は、彼らの働き方、遊び方、食事の仕方、通勤の仕方に現れています。また、生態系への反応、家畜との関わり、服装のスタイル、住まいの装飾、親子関係、そして吊いや宗教に対する姿勢の中にも息づいています。端的に言えば、日常生活の断片の中にそれはあるのです。オクタビオ・パスが述べたように、「私たちの言語、宗教、政治制度、文化が西洋に端を発しているとしても、メキシコにはもう一つの顔、すなわち先住民文明という『向こう岸』を見つめる顔があるのです。私たちは二つの文明、二つの過去の間に生きる民なのです」。

当然ながら、国有化という感動的な歴史の記憶と、Pemexの現代の生活を織り交ぜる必要がありました。幸運なことに、私たちは何百人もの引退した労働者たちに出会うことができ、彼らから当時の物語を直接聞くことができました。本の紙幅の都合上、全員の物語を載せることは叶いませんでしたが、その中から数名を代表として選びました。彼らの経験談は、この写真群の内容を大いに豊かにし、私たちが今日手にしている成果に歴史的な深みを与えてくれました。

私はすぐに、Pemexの世界が単に「黒い黄金」を掘り出す労働者だけで構成されているのではないことに気づきました。事務員、消防士、ヘリコプターの操縦士、海上プラットフォームの料理人、ダイバー、医師、溶接工、学校の教師もまた「石油の民」なのです。さらには、産業の周辺で働く人々——請負業者、タンクローリーの運転手、労働者の服を繕う靴職人や仕立て屋、アイスキャンディー売り、地元の農民や漁師たち。私の目には、彼らとその家族もまた、昼夜を問わず、ある意味で「石油の民」の一部として映りました。

特筆すべき点として、このプロジェクトの遂行中、私は撮影に関して一切の制限を受けなかったということがあります。立ち入り禁止区域も、境界もありませんでした。いつでも、どこでも、撮りたい場所へ自由に行くことが許されたのです。また、写真の編集段階においても、絶大な自主性を与えられました。写真家という職業は、検閲されたり、表現を削られたり、資金提供者の意向に沿うように作品を書き換えられたりすることに慣れてしまっていますが、今回、著者の創作の自由に対して示された尊重はかつてないものでした。その尊重の念をここに記すことは、私のキャリアにおいて最も喜ばしく、同時に責任の重さを感じた経験の一つです。したがって、本書に瑕疵や落ち度があれば、それはすべて私個人の力不足によるものです。

撮影に協力してくれた人々の忍耐と助けがなければ、このようなプロジェクトは決して完成しませんでした。彼らの多くは、シャッターを切る瞬間に、自分がこの創作の一部であることをはっきりと意識していました。私は自らの感性が許す限り、彼らに対して誠実であり続け、このドキュメンタリーの中で彼らにふさわしい尊厳を表現しようと努めました。ここに、すべての人々に感謝の意を表します。私の最大の願いは、彼らがこの本を自分たちの作品として受け止めてくれることです。

写真は本質的に孤独な作業ですが、物流の準備、インタビュー、暗室作業、編集、デザイン、監修といった前後のプロセスはすべてチームワークの賜物です。ここで一人ひとりの名を挙げることは叶いませんが、多大な助けをいただいた友人たちに触れたいと思います。

フランシスコ・カサノバ・アルバレス氏とカルロス・ランデロス・ガジェゴス氏は、並外れた情熱と支援をくださり、私の創作の自由を全面的に信頼してくれました。アドルフォ・ルイス・モレノ氏は、プロジェクトのためにPemexの広大なネットワークを精力的に調整してくれたかけがえのない盟友です。彼の企業に対する深い知識と寛大な共有がなければ、主題に深く切り込むことはできませんでした。助手のフェルナンド、ヘルマン、ロベルト、カルロス、ガブリエル、パブロ、そして特にアルベルト、重い機材を共に運び、ユーモアと忠誠心と助言をくれたことに感謝します。暗室で約2万枚のネガと1500枚以上のプリントをミスなく処理してくれたマヌエル・ロシャの献身にも感謝します。

写真の編集は、写真集制作において最も繊細な工程です。2万枚の中から169枚を選び抜き、それらを一つの意味ある、一貫した物語へと編み上げました。パブロ・オルティス・モナステリオ氏は、最初から最後まで心血を注いでくれ、彼の深い洞察は全編に行き渡っています。デザインはパブロ・メイヤー氏が担当しました。親族であることを差し引いても、彼のプロフェッショナリズムを深く尊敬しています。編集監修のアルテミオ・バルガス・アラソラ氏、最初のビジョンと信頼をくれたギジェルモ・モラ・バスケス氏、そしてインスピレーションをくれたグラシエラに感謝します。

最後に、極めて個人的な経験を共有させてください。私の家族はスペイン内戦を逃れてメキシコに移民してきましたが、到着したのはちょうど石油国有化の直前でした。当時私は2歳でした。この素晴らしい国に来て数年後、両親と私はメキシコ国籍を取得しました。これはひとえにラサロ・カルデナス時代の政策のおかげであり、第2次世界大戦やホロコーストから逃れてきた何千もの難民に門戸を開いてくれたこの場所で、私たちは安全と希望に満ちた新しい家を見つけることができたのです。したがって、私は深い私的な感謝の念を込めて、私たちに機会をくれたその人物に敬意を表します。彼のおかげで、この国の富は今、私たちのものにもなっているのですから。

1988年3月18日、コヨアカンにて。私の両親に本書を捧げる。

もう一つの版に何が起きたのか？

ペドロ・メイヤー 著

1988年9月の雨の日、次期大統領カルロス・サリナス・デ・ゴルタリは、ビクトル・フローレス・オレアを初代国家文化芸術会議 (Conaculta) の議長に指名しました。私はその官僚から朝食会に招かれ、数日前に印刷が終わったばかりの自著『煙火 (はなび) は一日中鳴り響いた』を、サリナス次期大統領に披露することになりました。将来の大統領はその本をパラパラと捲り、いかにも政治家らしく形ばかりの賛辞を述べました。

しかし、その直後に起きた出来事に対して、私は何の覚悟もできていませんでした。発行された5,000部のうち、4,800部が一夜にして消えてしまったのです。私の手元に残されたのは、契約どおりに受け取っていたわずか200部だけでした。

なぜ、このような事態になったのか。その説明を裏付けるデータはどこにもありません。しかし、この事実は私にある結論を導き出させました。この本は、政治界を刺激してやまない存在、ラサロ・カルデナス将軍に捧げられていました。当時、サリナス・デ・ゴルタリの政敵であり、選挙で最多得票を得たと目されていたクアウテモク・カルデナスの父親こそが、その前大統領カルデナスだったのです。結果として、最も容易な解決策は全刷部数を消失させ、厄介な議論の種を摘むことでした。誰が命令を下したのかは分かりません。そのような命令があったという形跡すら残っていません。唯一確かなのは、本が魔法のように跡形もなく消え失せたということだけです。

当時のプレスにも、『煙火は一日中鳴り響いた』に関する書評や批判が掲載されることは一切ありませんでした。当時のメキシコ石油 (Pemex) が資金の一部を使ってメディアを支配していたことを忘れてはなりません。本の存在や、消えた部数について、ほんのわずかでも言及する勇気のある者は誰もいなかったのです。また、芸術宮殿 (パラシオ・デ・ベジャス・アルテス) で予定されていた同作の写真展も、展示作品が跡形もなく「蒸発」してしまいました。

幸いなことに、私はすべての素材を保管し続けてきました。いつか——まさに「今」という時に—— Pemexという企業の人間味あふれる生存の軌跡を共有するために。この企業は、それが生まれたこの国と同じように、複雑で、矛盾に満ちているのです。

ペメックス・チャリート ペドロ・メイヤー 著

「チャリート・ペメックス」は、単なるロゴマークではありません。それは、エンジンの排気煙と原油の匂いの中から立ち上がった、メキシコ・ナショナリズムの象徴であり、一時代の紋章でもあります。その起源は、ラサロ・カルデナス大統領が歴史を塗り替える決断を下した1938年の「石油国有化」にまで遡ります。メキシコが初めて自国の地下資源の所有権を宣言したとき、このメッセージを街の整備工場から民衆の心の奥底まで届けるための「顔」、すなわちアイコンが必要とされたのです。

幅広の帽子(ソブレロ)、立派な口髭、そして伝統的な装束——。この「チャロ(メキシコ伝統の騎手)」は、勤勉で強く、誇り高い「深層のメキシコ(México profundo)」を体現する理想的な姿でした。こうして誕生した、微笑みを浮かべ自信に満ちたそのフィギュアは、単にグリースや潤滑油を売るためだけのものではありませんでした。それは、自国の資源で歩みを進め、恐れることなく未来を見つめる国家という「理念」を売っていたのです。グアナファト州サラマンカ出身のアルバロ・サンチェス・オテロは、販促イベントやガソリンスタンド、そして石油国有化記念日である3月18日のパレードで、このキャラクターを演じ続けました。その結果、彼は単なるロゴを超え、人々に直接視線を送りながら「ほら、君たちの国が君たちのために働いているよ」と語りかける、家族のような親しみ深い存在となったのです。

1940年代から50年代にかけて、「チャリート・ペメックス」はどこにでもいました。整備工場やガソリンスタンドには、その姿が描かれた金属缶が誇らしげに並んでいました。それは単なる容器ではなく、メキシコが自らの持ち物、すなわち自らの「黒い血」で動いているという、主権の証でもあったのです。

しかし、時代は変わりました。60年代から70年代にかけて近代化の波が押し寄せると、チャリートは押し流されていきました。最初は「カタツムリ」のような抽象的なシンボルへ、そして後には、より企業的で無機質な「緑の鷲」へと取って代わられたのです。

やがて、郷愁(ノスタルジー)が静かに積み重なっていきました。チャリートは製品から姿を消しましたが、日々の生活の中で彼を「物言わぬ友」として見て育った私のような世代の記憶の片隅には、今も大切に仕舞われています。伝えられるところによれば、アルバロは広告界の華やかさから遠く離れ、メキシコ市で物乞いをして命を繋ぐ日々を送り、1990年頃に亡くなったといえます。本書に掲載された写真は、その最晩年の姿を物語っています。

今日、「チャリート・ペメックス」はコレクターズアイテムとなり、富と労働と主権を約束したあのナショナリズムの残響を呼び覚ます、稀少な品となりました。それは単なる画像ではなく、大きな夢を抱き、自国の石油で立ち上がれると信じたメキシコの「視覚的な物語(ビジュアル・ストーリー)」だったのです。たとえ時が彼を棚から消し去ったとしても、その存在は歴史の中に刻まれています。この国が地底を見つめ、自らが運命の主であると想像した日々を思い起こさせる、消えない記憶として。

引退労働者たちは回想する……

「国有化直前の数日間、私たちは不眠不休で集会を続けました。全国執行委員会からニュースが届くたびに、私たちは爆竹を鳴らして人々を呼び集め、最新の電報を読み上げたものです。1938年3月18日はあまりに多くの知らせが届き、爆竹の音は一日中鳴り止みませんでした」

— フロレンシオ・アレバロ (70歳)

「政府、つまりラサロ・カルデナス将軍から、我々に協力する意志があるかと問われました。断る理由などありません。わが国の富を守らなければならなかったのですから」

— エドゥアルド・ディアス (70歳)

「ラサロ・カルデナス将軍がラス・チョアパスを訪れた際、台座に据えられた自分の胸像を見てこう言いました。『そんなものは片付けて川に放り込め。俺はまだ死んでいない!』」

— ダニエル・アルバレス (70歳)

「国有化後の数年間は、ひどい困窮の時代でした。計算機のロール紙は一度使っただけでは捨てられず、裏まで使い切りました。短くなった鉛筆の端っこ同士を繋ぎ合わせ、一本の鉛筆にして使ったこともあります。そんな状況が5年ほど続きました」

— イリネオ・ガジェゴス (73歳)

「タイプライターを打つ音が聞こえたので中に入ると、二人の『グリンゴ (アメリカ人)』がいました。私たちは彼らに言いました。『出て行け! ここを仕切るのは、これからは俺たちだ!』」

— マルセリーノ・サンチェス (70歳)

「外国人上司たちは、長くは留まりませんでした。労働者と親しくなりすぎるのを恐れたのでしょう。エル・プランの労務主任だったテキサス人のキング氏は例外的に長く勤めましたが、他の者は悲惨でした。シャブーストという労務主任は、その地で命を落としました。ある日彼が、ブラックリスト (Bola negra) に入れられた『エル・コロラド』という男に『お前の家族に糞でも食わせておけ、仕事はやらん』と言い放ったため、彼に殺されたのです」

— ビセンテ・パラデス (74歳)

「食事の時間は、時計を手につっかり15分しか与えられませんでした。現場にいたので、弁当袋を運んでくるだけで時間は終わってしまいました」

— J・カルメン・ルエダ・ソリス (82歳)

「探査に出る時は、食料は各自で用意しました。最初の時は15日で底をつき、その後の15日間は野生のサポテの実を食い、水を飲んで生き延びました」

— ゴンサロ・レサマ・バルカサル (76歳)

「予備の部品すらない中で、私たちは奇跡を起こしながら産業を維持し続けたのです」

— エドゥアルド・ボライナ (76歳)

「90人の男たちが『メカパル (額で支える背負い紐)』だけで、あらゆる資材を運びました。何も知らない私たちが、どうやって自分たちを守れたでしょう? 私たちはまるで子供のようなようでした」

— フェルナンド・ピエドラ・トーレス (77歳)

「バロウズという男は実に傲慢でした。工場の主任でしたが酒好きで、酔って仕事に来ては人々を虐待していました。しかしある日、彼がトロッコ (Calamazo) から降りた瞬間、マチューテ (山刀) の一撃で首をはねられたのです」

— エウセビオ・ペレス・ゴンサレス (72歳)

「1905年、父はミナティラン近くのゴム農園で働いていました。私たちはエル・チャポへ油井を見に行きました。現地に着くと、突然、地底から凄まじい勢いで黒い水の柱が噴き出しているのが見えました。まるで千の悪魔が暴れているような力強さでした」

— **ビリアト・ダ・シルベイラ (90歳)**

「グリンゴに無礼を働けば、すぐに『ブラックリスト (Bola negra)』に入れられ、すべての現場に通知が回りました。仕事を得るために名前を変えなければならない仲間もいました。当時は年齢と出身地を聞かれるだけで、写真は必要なかったからです」

— **ルベン・ラミレス (68歳)**

「あの時、私たちはとても大きなものを持っていました。それは『希望』です」

— **イスマエル・マルドナド (68歳)**

「最初の罷工 (ストライキ) で、私たちはようやく『休日』を勝ち取りました。それまでは週に6日働き、その分しか賃金は出ませんでした。休暇なんて、夢にも見られなかった時代です」

— **エルネスト・ソサ・フエンテス (80歳)**

「息子が私と同じようにメキシコ石油の年金を受けていることは、私の大きな誇りです。彼が生まれた1934年、私たちは外国の石油会社を相手に激しいストライキを戦っていました。会社側は労働条件の改善を拒んでいましたが、その果実を後に息子が享受することになったのです」

— **ヘスス・カステリャノス (83歳) と息子ホセ (53歳)**

「外国会社の時代から、私たちは仕事に責任を持って取り組んできました。だから国有化が宣言され、最初のメキシコ人技師たちを迎えたとき、彼らは私たちを尊重し、一人前として扱ってくれるようになったのです」

— **エレアサル・コルドバ (72歳)**

「私は1914年、ベラクルスへの侵攻軍に対抗するため、志願兵としてオアハカのイステペクから来ました。部隊が引き揚げた後も、私はミナティランに残りました。『エル・アギラ』社のグリンゴが私の軍刀を見て、手招きしました。彼が『どこから来た?』と聞くので、私は答えました。『ベラクルスからお前らグリンゴを追い出すために、山を越えて来たんだ』と」

— **フェルナンド・ピエドラ・トーレス (77歳)**

「ストライキ委員会から『誰も工場に入れるな』と言われました。朝、最初に現れたのは、私の採用を助けてくれた親切なグリンゴでした。私が最初に止めたのが彼でした。『あなたは入れません』と私は言いました。『ストライキ中なのが分からないのですか?』」

— **エウヘニオ・バンダ (79歳)**

「国有化後、産業は外国石油会社による激しいボイコットにさらされました。部品も材料も手に入らず、知恵を絞り、何度も命を懸けなければなりません。220トンのダイナマイトを運んだこともあります。夜間に航行しましたが、月明かりの夜には遠くに潜水艦の潜望鏡が見え、恐怖を感じたものです」

— **エラスモ・バルデス (92歳)**

「グリンゴが去った後、技術を知る者が知らない者に教え、事務局では組合員に仕事を教え始めました。そうして、物事が英語で行われることはなくなっていったのです」

— **アントニオ・サンチェス・ロペス (80歳)**

「国有化の時、カリングトンさんというオランダ人技師が泣いているのを見ました。エル・プランの圧縮機担当だった彼が流した涙は、怒りではなく悲しみの涙でした。他の多くの外国人と同様、彼もまたメキシコを深く愛するようになっていたからです」

— **エルネスト・ソサ・フエンテス (80歳)**

プロフィール

ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer) 若き日から写真家を志したが、当時は正式な養成機関がなかったため独学で技術を習得。そのキャリアは、テクノロジーと視覚的叙事詩(ビジュアル・ナラティブ)の融合を探求し続ける旅であった。「グループ・アルテ・フォトグラフィコ」を設立し、初のラテンアメリカ写真シンポジウムを推進したほか、メキシコ写真評議会を創設。その後、世界初の写真専門サイト『ZoneZero』を立ち上げ、1,500人以上の作家の作品を公開した。世界初の写真CD-ROM『我、記録のために撮る (Fotografía para recordar)』を制作した先駆者であり、回顧展『異端 (Herejías)』は世界17カ国、60以上の美術館を巡回。また、ペドロ・メイヤー財団およびフォト・ムセオ・クアトロ・カミノス(写真美術館)を設立した。2020年からは、60年にわたる画業を集大成し、絶え間なく変容する時代におけるイメージ、記憶、そして生を考察する40巻以上の書籍シリーズ『ミラマール・コレクション』の制作に取り組んでいる。

ヘラルド・モンティエル・クリント (Gerardo Montiel Klint) 1968年メキシコ市生まれ。工業デザイナー、写真家、教授、コラムニスト。特に「イデオロギーの移行現象としての写真イメージ」と、それが集団的想像力(イマジナリー)に与える影響の解明に注力している。スペインの雑誌『EXIT』、ゲティ財団、サンディエゴ写真美術館(カリフォルニア州)の顧問を歴任。また、メキシコ国立フォトテカ・システムの雑誌『Alquimia』の諮問委員も務める。イメージを軸としたその活動は、自身の作品展、キュレーション、美術館へのアドバイザリー、出版など多岐にわたる。写真撮影:アルフレド・デ・ステファノ (Alfredo de Stefano)

ファン・ミゲル・スンスネギ (Juan Miguel Zunzunegui) 1975年メキシコ市生まれ。人文学、コミュニケーション学、哲学を専攻し、現代メキシコで強い影響力を持つ歴史家・学者。反スペイン的な歴史観(黒い伝説)を批判し、メキシコの歴史を再解釈することで、文化的統合としての「メスティサヘ(混血)」の価値を提唱。数多くの著作や講演を通じ、公式な歴史叙事詩に疑問を投げかけ、征服にまつわる歴史的トラウマを克服するための代替的な視点を提示。国民的歴史の普及における第一人者となっている。

アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz) 多角的な視点を持つビジュアル・アーティスト。知覚、想像力、記憶、領土、アイデンティティ、そして時空の概念を中核に据え、現実の構築様式を問い直すナラティブの創出を研究テーマとしている。その作品は、写真、ビデオアート、ビデオインスタレーション、音楽、文筆、詩など多岐にわたる形式で発表されており、人間、テクノロジー、自然の交差を探求している。現在はエディトリアルデザイナーおよび『ミラマール・コレクション』の編集者としてペドロ・メイヤーに協力する傍ら、ペドロ・メイヤー・ギャラリーのキュレーションと展示構成を担当している。

ヒメナ・サンパヨ (Ximena Zampayo) メキシコ国立自治大学(UNAM)芸術デザイン学部にてビジュアル・アーツを専攻。表現媒体として絶え間なく変容し続けるイメージの可能性を探求する、新世代のビジュアル・クリエイター。その作品を通じて、共感的かつダイナミックな世界観を投影し、移ろいゆく万華鏡のような視点を表現している。現在はペドロ・メイヤーのアシスタントを務めるほか、『ミラマール・コレクション』の数々の作品で編集を担当している。

「ミラマール・コレクション」既刊目録

- Algoritmos (アルゴリズム)
- Autorretratos (自画像)
- Avándaro (アバンダロ)
- Colonia Ajusco (コロニア・アフスコ)
- Cuba, tomos I y II (キューバ:第1巻・第2巻)
- Del aquí al más allá (此岸から彼岸へ)
- Durante el 68 (1968年のさなかに)
- El Teatro Universal (普遍的劇場)
- Fotografío para recordar (我、記録のために撮る)
- Huejutla y otros pueblos (ウェフトラと村々)
- Ixtlilco El Grande (イシュトリルコ・エル・グランデ)
- La Mixteca (ラ・ミステカ)
- Las Truchas, Ciudad Lázaro Cárdenas (ラス・トルチャス:ラサロ・カルデナス市)
- Testimonios sandinistas, tomos I y II (サンディニスタの証言:第1巻・第2巻)
- Un Ecuador, tomos I y II (ひとつのエクアドル:第1巻・第2巻)
- Virgilio (ビルヒリオ)
- Yuma (ユマ)

その他、23タイトルを現在制作中。

「ミラマール・コレクション」の既刊タイトルに関する詳細は、こちらのQRコードをスキャンしてご覧ください。

<https://pedromeyer.com/es/miramar/>

本コレクションの制作にあたり、ご協力いただいたすべての方々に深く感謝申し上げます。



著者ノート

ここで一点、明記しておきたいことがあります。本版におけるいかなる誤植や至らぬ点も、その責任はすべて私にあります。エラーを完璧に防ぐための術をすべて持ち合わせているわけではないことは自覚していますが、これらの本を世に送り出したいという願いは、失敗を恐れる気持ちよりも強いものでした。読者の皆様には、完璧さと「可能な限りの最善」との間にある、この繊細な均衡に理解をいただければ幸いです。

また、リカルド・“タピール”・マルドナド、リカルド・“REO”・エスピノサ、ジルベルト・チェン、セルヒオ・トレダノ、そしてパブロ・アギナコの各氏に感謝の意を表します。彼らの繊細かつ常に明晰な助言が、この第2版をより豊かなものにしてくれました。

ペドロ・メイヤー財団 (Fundación Pedro Meyer, A.C.) は、著作権の保護を支持しています。著作権は創造性を刺激し、思想や知識の多様性を守り、表現の自由を促進し、活気ある文化を育むものです。

本書の正規版をご購入いただき、著作権法を尊重してくださったことに感謝いたします。そうすることで、皆様は著者やクリエイターの活動を支え、当財団が文化的な活動を継続していくための力となってくださっています。

なお、本書に掲載されている写真の大部分は、ペドロ・メイヤーによる著作物です。

本書は2026年2月、メキシコ合衆国オアハカ州サンタ・マリア・デル・トゥレの
Repro.Gráfica, S.C. 工場にて印刷を完了した。

©『石油の陰で』— 改訂版 ペドロ・メイヤー 2026年 第1版

本版は、以下の内訳で限定発行されたものである。

クラシック・シリーズ：限定200部 (シリアルナンバー入り)

ギャラリー・シリーズ：限定50部

コレクター・シリーズ：限定50部

エディション番号：_____



PEDRO MEYER